

大森梨紗子(2点/綿布に油彩) 繊細な植物の末端である実 = 根に空間の余白が生じる。奥行きが増し、描かれていない場所に何があるかが重要となる。それは視線も同様だ。

姜善英(5点/紙にアクリル、ペン) 目に見える世界が姜の中で現実に変化し、姜の視線は再び姜の手により現実の作品として現前する。無窮運動は繰り返されるべきであろう。

カン・チョウン(3点/紙にアクリル) アニメ/マンガ風な印象があっても、植物の見えない動作のフォルムが沈殿している。画面の大きさに対して線描を拮抗させるべきだ。

金基永(2点/ワックス) ワックスというメディウムのみを立脚させる。空間が瓦解し、イメージのみが浮遊する。次の課題は、メディウム自体の破滅と消滅になるのであろう。

小出恵理奈(5点/紙に色鉛筆) 小さなデッサンの中に、なんとと言う広大な世界が広がっているのであろう。音、匂い、湿度、季節、風、光、土...。様々な要素が込められている。

顔綱令(6点/紙にアクリル、コラージュ) 小さな画面にコラージュが施されイメージが分断し、見ることも狭間にある見えない情報が浮彫りとなるので大胆さが欲しい。

小口あや(2点/キャンパスに油彩) 支持体に厚みを持たせ、奥行きを殺し、描かれている世界が迫り出してくるように見える。簡潔に立体化せず、絵画に留まる必要性を帯びる。

田崎亮平(2点/樹脂) 固められた樹脂の内側には、全く世界が広がらない。物語の構築を排除し、ミニマルに留まらず、素材も無視してミニマル以上の何かが生まれている。

長沢優希(3点/鉄) 鉄が石や木に変容する理由は、マチエールを封じ込めているためであろう。変化とは錬金術の方法である。すると形の溶解し、色は別の次元へ旅立つ。

中道由貴子(5点/パネルにアクリル) 速やかに重なり消える印象と、何時までも滞る表現が背理する。見るものがこの狭間を往来すると、異次元に到達することが可能となる。

萩谷将司(5点/キャンパスに油彩) ディペインズマンにより空間が移動する。そこに立ち現れるのは本人の原風景であり、その原型は他者と共有する力を携えているだろう。

河明求(4点/陶土) 陶器では実現できない世界観を持つ。単に潰され変形させられた形態ではなく、初めからそう有るべきだったのかも知れない。茶の世界との無縁さがいい。

藤木光明(3点/綿布にアクリル) 波が虹と化す変化よりも、縦に流れる重力が重要となる。そこに残された筆致の展開が必要となる。太陽の光も重力に影響されて可視化する。

ミリツア・ニコリッチ(3点/デジタルプリント) 写真が光を受け取るのではなく、作品として成立した後に発光を始める。光を操る意思是、誰でもできることを教えている。

三輪田めぐみ(2点/キャンパスに油彩) 事物が平面に溶け込んで事象と化す。事象が現象に還元されない理由は、ここに絵画が存在する由来でもある。眼の動きは自由なのだ。

吉井愛(2点/油彩) 苺のフォルムに赤蝦と蛸が自らに融合する幻想に溢れるが、本人のリアリズムが発生している。現実を描くことがリアリズムではないことを知っている。

ヨヴァナ・トゥーツォヴィッチ(2点一組/プレキシグラス、エポキシ樹脂) 原始の人間でありながら、極めて現代的である。表情よりも、ボディランゲージが語りかけてくる。

2014年の on the steps はこれまでより若さに漲っていた。若さとは訳の分からなさや野望、これから描いていこうという野心である。無論、年配でも野心に燃えるアーティストは多いが、若い時でなければできない勢いは失われる。いずれも作品も、そこに見出せないビジョンを探る傾向を携えている。それは先行きが不安な世相に対して、自分達が何をしなければならぬのかといった暗中模索の状態を抜け出し、定められない目標に向かって歩みだしている姿を見出せる。アンデパンダン展が本来荷っていた役割を、この展覧会に見出した。芸術は自由である。自己規制することなく、未だ見ぬ世界に視線を真直ぐに向けるべきだ。

